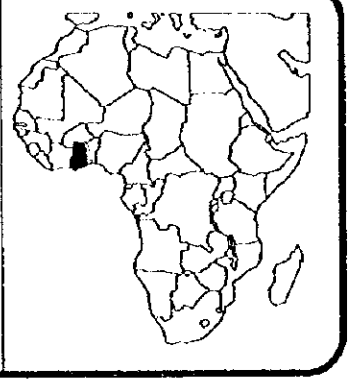
31

ガーナ

# エッサム村・ヤシ油加工プロジェクト



関係機関：ガーナ女性及び開発国家委員会（NCWD）
オランダ国際協力総局（DGIS）
国際労働機関（ILO）

本事例は、「The Emancipation of Women-An African Perspective」に記述されている事例を簡単に紹介したものである。従って、詳細な内容については原本を参照されたい。

1960年代後半に「ガーナ教育サービス」の教師が、ガーナ東部エッサム村で棒石鹸の作り方を教えたことを契機に、油ヤシの加工を女性達を組織化して行い、石鹸等の製造で所得を創出し生活を向上させた。教師は、クイーンマザー*の娘と結婚し、クイーンマザーの支援を受けて、女性20人余りの石鹸作りクラスを組織した。この活動を「ガーナ女性および開発国家委員会（NCWD）」が支援し、オランダDGIS、ILOなどが援助した。その後、女性たちへの識字教育、デイ・ケア・センターの設置などへ展開していった。（註＊：首長の夫人で部族集団の女性達を束ねる力を持つ。）

現在もNCWDがサポートを続け、周辺村落に新規のプロジェクトが生まれている。

## ジェンダー問題

畑は男性が所有し、ほとんどの女性の主たる経済活動は、ヤシの実をヤシ油に、ヤシ仁をヤシ仁油にすることである。女性達は通常男性からヤシの実を購入し、各々自宅で油に加工し、近郊の都会の市場で販売する。その加工作業は過重で厳しいが女性は、油からの収入で自分と子供の必需品を賄わねばならない。

また、女性は学校教育を受けておらず、機械の操作などは男性にしかできないとの思い込みが男女双方にあった。

## ジェンダーへの配慮

①NCWDは、ガーナにおける女性解放を目指して1975年に設立された国家機関である。NCWDは、設立後すぐにガーナ女性の緊急的関心事を調査した。その結果は「子供により良い食事と衣類を与え、より健全に育てることが出来るようになること」であった。これに基づいて、NCWDは各地で収入獲得を含めた教育プログラムを展開し、栄養、子育て、家族計画、衛生、税の支払い等社会的責任などについての講義と実演を組み合わせて行われた。

②NCWDは、「プロジェクトが成功するためには男性の理解とサポートを得ること」が必要であると考え、次のような配慮をした。

＊プロジェクトについての話し合いは、当初から男性と女性が参加している会合で行った。

＊女性達のみが援助対象となる事を避け、男性も農業省のサービス対象となるよう組織化支援を行った。

<活動の経過>

1960年代後半　職業訓練補習学校に固形石鹸作りを教えるための男性教師が赴任

↓　（女性達：油ヤシが豊作になると、多量に作ったヤシ油の販売が困難）

男性教師が空いた時間を利用して女性達に石鹸作りを教える

↓　（主要原料である油ヤシは地域産品、石鹸作りに必要な苛性ソーダは都市から購入）
（クイーンマザーの支援（教師の妻の母親））

石鹸作りの成功→女性たちの信頼を得て識字教育開始

↓　（→苛性ソーダの入手についてNCWDに支援を依頼）

NCWDによる支援→＊製造拡大および女性の過重労働軽減のため油抽出機入手支援を決定

↓　＊NCWDの仲立ちでオランダ、ILOの無償資金援助対象となる。

NCWDが長老・首長に土地の提供を要請、承諾を得る→その土地に工場を建設

工場運営方針は女性達自身が決定

＊今回の資金援助を受けられない女性への支援資金作り
①油加工プロジェクトのメンバーは毎週一定量のヤシの実を提供、②それを加工して食料油と石鹸を製造、③販売収入は共通基金へ入金（銀行口座開設）
＊支援資金作りにかかる時間以外は会員が手数料を払って利用→手数料収入により工場を維持

## 活動の成果

①女性達が収入を獲得した。
②女性達は自尊心を大きく向上させ、自分達の能力に対する自信を持った。男性も女性達が行っていることに感銘を受け、女性達を誇りに思うようになっている。女性が会合で自ら立ち上がり発言をするようになり、地域社会に関わる事柄について意見を述べることもある。
③女性達は、自分達に影響を及ぼす事柄について自分で決定できるようになった。
④女性達がNCWDを信頼したことで、NCWDの教育プログラムは地域社会に根付き、発展の芽となっている。
⑤女性が育児に全責任を負う社会にあって、デイ・ケア・センター等を自ら設置して家事育児、保育を女性グループで分担対処するようになった。

## 留意点

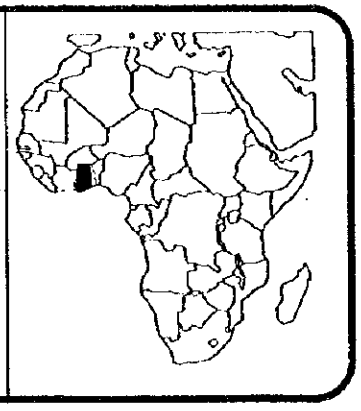
活動推進者の牧師が、村のクイーンマザーの娘婿という立場にあったことで、村の男性たちは妻が識字教室に出席することを許しやすかった。

■参考文献：①「農村生活改善のための女性に配慮した組織化支援検討事業」, 1993, 国際協力事業団
②「The Emancipation of Women - An African Perspective」, GHANA UNIVERSITY PRESS

32

ガーナ

# 魚燻製作りプロジェクト



関係機関：ガーナ女性及び開発国家委員会（NCWD）
国連児童基金（UNICEF）

本事例は、「The Emancipation of Women-An African Perspective」に記述されている事例を簡単に紹介したものである。従って、詳細な内容については原本を参照されたい。

ガーナ女性及び開発国家委員会（NCWD）は、ガーナでの主要なタンパク源である魚について、簡単な加工技術の導入により女性の収入獲得に結びつけることが出来るよう、ガーナ沿岸部アクラ近郊において燻製作りのパイロット・プロジェクトを実施した。当初は、ガーナ水産省が開発した燻製炉の普及を図ったが、女性たちは新しい炉の使用に消極的であったため、女性たちの協力により開発された炉が使用された。開発炉の使用により、煙害が減り、清潔さが保たれるようになったため、女性や子供の衛生向上をすすめる国連児童基金（UNICEF）は、他地域への炉の普及を支援することになった。

## ジェンダー問題

ガーナでは伝統的に、結婚の際、女性は夫から資金を受け、これを元手に収入活動を開始し、自分と子供の必需品については自らで賄うことが求められる。しかし、意思決定機関への参加や資源へのアクセス、コントロールは限られている。

海や川、湖の沿岸に住む女性にとって、魚の保存処理は重要な問題であり、漁業季節になると冷蔵施設がないことから、腐る前に魚を燻製にするため、寝ずに作業しなければならない。また、漁師たちにとっても、冷蔵施設がないため大漁時には魚を海に戻さなければならなかった。

## ジェンダーへの配慮

NCWDはガーナ政府によって設立された、女性の意思決定過程への参加・参画の拡大を目指す機関である。国レベルで行った調査により、女性の緊急性の高いニーズは収入の獲得・向上であると判明したため、それに応えるべく事業を展開している。全国でワークショップが開催され、女性が携わる収入獲得活動を特定し、その活動における制約要因が何であるのか検討された。

＜具体的な活動＞

NCWDは、水産省の設計した魚燻製炉を女性たちに紹介することで、伝統炉を使用する場合より作業効率を向上させようとしたが、改良炉を数ヶ月使用してみた女性たちは、自分達の用途には適さないとして、その後の使用を拒絶した。なぜなら、改良炉は伝統炉のデザインと大きく違い、女性たちはその使用に容易に慣れることは出来なかったうえ、燻製にすることが出来る魚の数に関して、改良炉は伝統炉に対し顕著な優位性を持ち合わせていなかったからで

ある。

そのため、チョルコル村の女性たちとガーナ化学工業研究協議会の食品研究所が共同で開発したチョルコル炉を導入し、女性たちのニーズに応えた。チョルコル炉は、使いやすく、生産性が高く、時間や燃料を節約できる物であった。NCWDは、導入に際してワークショップを行い、女性達のために魚燻製事業の経営について研修を行った。

**NCWDによるパイロットプロジェクトの流れ**

NCWDが水産省開発の燻製炉を女性達に紹介
- ・デザインが従来使用している統炉とは違いすぎた
- ・衛生的だが生産量に関しては、伝統炉に比し優位性が少ない

↓

数ヶ月の後、女性たちは使用を拒否

NCWDがチョルコル炉を女性達に紹介

ガーナ化学工業協議会がチョルコル村の女性と協同開発
- ＊伝統炉を基に改良したもの
- ＊時間・労働・燃料を節約するもの
- ＊一度に多量の加工が可能であるもの
- ＊煙害が防止できるもの（煙突の使用）
- ＊周囲が清潔且つ整頓できるもの
- ＊比較的安価な部品と簡単な技術を利用したもの

↓

NCWDが女性のためにワークショップを行い、魚燻製事業の経営について研修

女性達はグループを作り、炉製造のための部品を安価に購入

↓

NCWDが女性グループを利用し根教育プログラムを実施
- ＊学校教育の有用性を認識
- ＊家族計画の必要性を認識
- ＊職業訓練の実施

## 活動の成果

①女性たちの収入が向上し、女性の緊急のニーズであった収入の獲得／向上が実現された。
②保存量が増えたことで魚の入手が容易になり、家族の栄養摂取が改善された。
③大漁時に魚を海へ戻す必要がなくなり、村に活気が生まれ、男性たちも積極的に事業に関わるようになった。
④女性たちは収入向上により、自信と自尊心を向上させた。また、他の者に職を与えることが可能となった女性も現れ、家族内や社会で尊敬され、地位が向上した。これらの女性の存在によって、他の女性も視野を広げることができ、女性の社会的地位の向上に貢献している。

## 留意点

①改良技術が一般的に受け入れられるためには、その技術を利用する人々が伝統的に行っている方法と類似した基本原理を持ち、設計／開発段階で、利用する人々の意見を十分に求め、それを反映することが必要である。
②新技術の利点が明白に示されて、初めて人々は新技術導入のための資金投資の意欲を持つことができる。
③意図する結果を達成するためには、「そのプログラムを行おうとする人々は本当に自分達の利益を考えている」と受益者が納得することである。納得があって初めて、外部の人間に対する警戒が解かれる。

■参考文献：「The Emancipation of Women - An African Perspective -」, GHANA UNIVERSITY PRESS

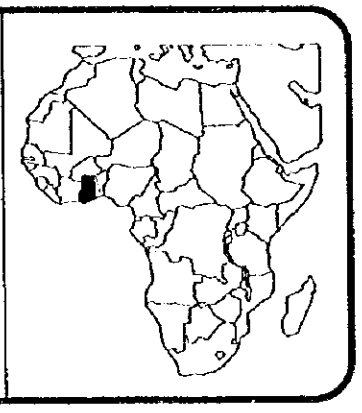
33

ガーナ

# 農村における林業と女性の役割

## --樹種の選択に関連して--

著　　者：Kofi Owusu-Bempah
（論文による分析事例）



本事例は、「Gender Issues in Farming Systems Reseach and Extension」に記述されている事例を簡単に紹介したものである。従って、詳細な内容については原本を参照されたい。

ガーナでは、森林の乱伐で、環境の悪化、土壌の侵食等が急激に拡大している。森林の荒廃防止のため、「開発のための農村アグロフォレストリー・林業プログラム（The Agroforestry and Forestry for Development Programs (RAFDP)」が森林のサヴァンナ化進行中の地域をモデルとして進められた。

Kofi Owusu-Bempahは、アグロフォレストリーの体系を、①造林＋農作物②造林＋家畜③造林＋農作物＋家畜の三つの基本的タイプに分類し、この組合わせの中でそれぞれ適当な樹種と技術を選べば、生産面でも、自然保護の面でも永続的な経営が出来るとし、その過程において、女性の果している具体的な役割を明らかにした。

## ジェンダー問題

① 女性達は悪化した土壌で大切な食料を生産し、水や薪炭を得るために遠くまで歩いて行かなければならず、家族の健康維持のためには薬草を集めなければならない。また森林破壊により、保水力が低下し、近くの川が涸れて来たため、遠くの川まで水汲みに行かなければならず、女性の負担が大きくなっている。

② 女性を含めたアグロフォレストリーのプロジェクトは望ましいことであるが、プロジェクトの計画、実施等に関し、大部分のケースでは女性は除外されている。

③ 男性の林業普及員が女性達と働くことに気が進まないことは周知の事実である。

④ ガーナでは、女性のみで林業開発をすすめることは認められていない。女性達の林業開発に対する貢献度については、あまり評価されていない。

⑤ 伝統的林業について、女性達は、深い知識と経験をもっているにも拘らず、どの調査報告を見ても、女性に関する記載は殆どない。

## ジェンダーへの配慮

農村アグロ・フォレストリーのプロジェクトは、政府からの干渉や、法による強制によって実施されるべきものではない。

ガーナの森林のサヴァンナ化進行中の地域を荒廃から救うためには、周辺地域の住民達によっ

て、有効な森林保護の体制（アグロ・フォレストリーの体系）を作りあげることが必要とされている。プロジェクトで用いる樹種は、当地域にあるもので、環境適応性があり、長期的な経済的魅力のあるものを活用すべきである。調査対象となったプロジェクトでは、男性と女性は別々に意識され、家庭内においても農場においても平等に注意を向けられインタビューを受けた。データ収集には、同数の男性と女性が協力した。

女性と森林との関わりは次のようなものがある。

① 森林破壊が行われている中で、自然林の樹木に対する保護は、今でも農家女性の仲間達で行われている。

② 女性達は82種の異なった樹種を知っており、これら樹種のいくつかについては、その使用目的について記憶している。

しかし女性は、子供達が、誰一人として森林保護に興味をもっていないことを嘆いており、自分達が年をとってくると、森林破壊が更に進み、再生の可能性が薄れていく恐れがあることから、若い世代を教育して、森林の保護と育成を続けてもらうことが最大の関心事となっている。

③ 特に女性達は、樹種の選定について、最も重要な樹種即ち食料用のもの、健康の維持増進に必要なもの、経済的に有用なものの植栽を、国の土地利用計画に合わせて実施することに努めている。

## 分　　析

著者はこの調査の中で以下のように分析している。

① 昔から林業農家の中心は女性であったが、本調査でその役割が再認識され、女性の方がむしろ男性より優れた森林保護者であり、適切な対応が出来ることが分かった。

② 家畜についても、女性が主な飼育管理者であり、有効な飼料の確保と、森林への有機質、家畜の排泄物などの還元への役割が明らかになった。

③ 薬草あるいは治療に使われる植物は、アグロフォレストリーと環境保護の両面で最も導入の可能性が高いものであり、これらの種類を知っている女性の役割の重要性が更に増した。

④ 農家女性は、アグロフォレストリー体系で重要な存在であり、特に女性が適切な樹種を選ぶ役割は高く評価された。

なお、調査者は女性のプロジェクト参画について次のようなコメントをしている。

○農民の推薦した樹種を更に研究するとともに、プロジェクトの実施に当たっては、調査、計画、実施段階で、女性にも参加してもらうことを考えている。

○調査員は、コミュニティー作りとアグロフォレストリーの発展には、女性参加を強調すべきであると考えている。

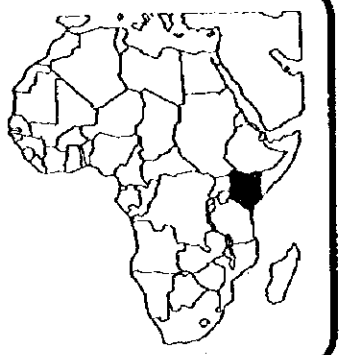
○農家女性は、一般の農民同様、全体のアグロフォレストリー体系の中で、重要な構成員である。適当な樹種を選定する能力の高い女性の役割を認めなければならない。

■参考文献：「Gender Issues in Farming Systems Research and Extension」edited by Susan V. Poats, Marianne Schmink and Anita Spring, 1988, Westview Press, ('The Role of Women Farmers in Choosing Species for Agroforestry Farming Systems in Rural Areas of Ghana' Kofi Owusu-Bempah)

34

ケニア

# 住民参加型農村調査に基づくプロジェクト



関係機関：ケニア国家環境事務局（NES）
クラーク大学（米国）

ナイロビから東方へ90キロに位置する人口約8,000人のムブシャーニ村で、1988年からパイロットPRA（Participatory Rural Appraisal）が実施された。ムブシャーニ村は、半乾燥地帯に位置する丘陵地である。人々は農牧畜を中心に営んでいるが、近年土地への人口圧力が高まり、資源の劣化が進んで、特に水不足の問題が深刻化している。

この調査の目的は、比較的短期間に、地域社会における多くの住民の参加を得ながらデータを収集し、問題の範囲を限定して解決策の順位を決めるとともに、天然資源管理に関する総合的な村落計画を案出することであった。パイロット PRA を実施したケニア国家環境事務局（NES）チームは、農業経験を有する社会科学者をリーダーとして、生物学者、社会科学者、環境情報専門家、村落保健員、栄養士によって構成されていた。また、特に水資源とその保全について、改良普及員と密接な関係を保った。さらに、地元指導者の協力が甚大であった。

## ジェンダー問題

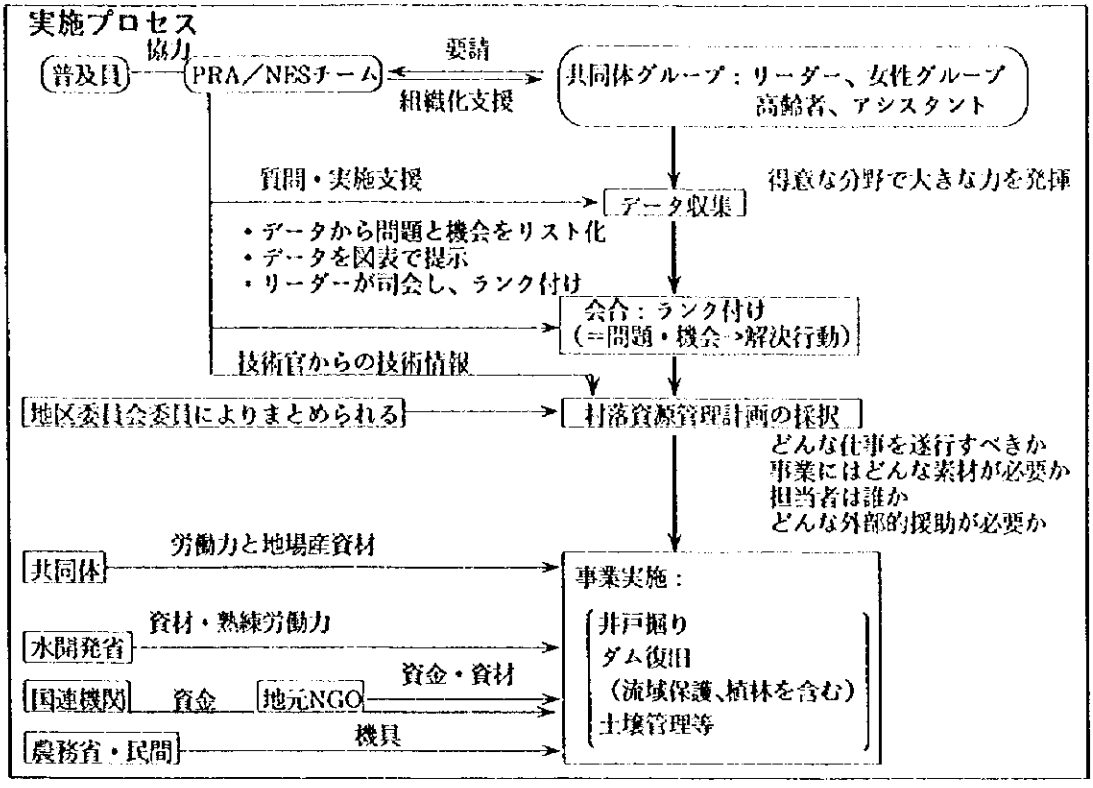
ケニア全体を見ると、女性の教育機会は男性に比べて限られており、識字率も男性よりかなり低い。伝統的には、女性は食糧生産と小家畜飼育に責任を負っていたが、現在では換金作物生産についても女性の労働貢献が男性より大きくなっている。更に、小規模農家の3割弱が女性世帯主世帯であり、出稼ぎ等による男性不在世帯も5割弱にのぼることから、農業経営上の女性の役割を無視できない。こうしたことから、ケニアでは1983年に農業普及活動に訓練と訪問方式（T&V）が導入されて以来、女性をコンタクト・ファーマーとして起用するなど、女性に配慮した普及活動が広がってきた。

ムブシャーニでも、女性達は、男性の改良普及事業担当官や地元官吏がいる場ではなかなか発言できず、男性と比べて社会的地位の低さを感じさせるが、一方でPRA活動に積極的に参加し村落開発活動を担う主力となっていることは、女性に配慮した普及活動の成果を垣間見ることが出来る。

## ジェンダーへの配慮

パイロットPRAを進めるに当たっては、当初から、地元女性グループのリーダー達が積極的に関わっており、ムブシャーニがPRAの実施地として選定されるに際し、彼女達の働きかけは大きかった。PRA活動実施中及び実施後も、公式のリーダーであるアシスタント・チーフだけでなく、彼女達の技能とコミットメントは大きな影響力を持った。

また、NES チームの活動の進め方も、性別、経済力、年齢、民族等様々な階層に直接コンタクトする事に常に留意するとともに、会議などで女性の発言が少なければ、発言を促すよう支援する姿勢があった。特に、初期のデータ収集段階では、村の道を歩いて会った人全てにインタビューしたり、共同体の年代記を作るに当たり、高齢者（長老たち）の知識を高く評価し助力を仰いだり、様々な人物を引き込みつつ共同体全体の問題となるよう気を配った。




## 活動の成果

PRAの結果、地元共同体や政府機関、地元NGOなどが事業に取り組み、下記の成果を得た。

①ムブシャーニダムが完全に修復され、水源が確保された。

②新しい苗木畑が開設され、運営されるようになった。

③いくつかの丘陵地が、女性グループの組織化と労働を通して段畑として農地化されている。個々の農民は、女性グループの作業を手本に私有地に段畑を構築した。

④いくつかの女性グループが集って、トウモロコシ製粉工場を買収し、順調に稼働させている。

⑤PRAから4年が経過したが、今でも共同体グループは精力的に活動を続けている。

## 留意点

①ムブシャーニの住民たちは、自分達の共同体の問題については非常によく認識している。彼等は定量化された情報についての理解は弱かったが、問題を重要度に応じてランク付けし、その解決策を考えだすのに十分な知識や情報を持ち合わせている。

②このPRA活動には相当数の住民が持続的に参加したが、2つの要因が影響していると考えられる。(i) PRAチームが、「共同体の知っていることを知ることに関心がある」との態度で臨んだため、住民参加を前提とした村落からのデータ収集は、それが続くにつれ、弾みがついてきた。(ii) PRAはなすべきことを求める実地的な調査であったため、村民はPRAチームが何を求めているのかを知ることができたし、住民からコメントもでき、初期の段階から共同体はPRAに協調感を持った。

■参考文献：①「若干の事例調査に見るラピッド・アプレイザル方式の概要」,1995, 国際農林業協力協会（Rapid Appraisal Method, 1993, 世界銀行の抜粋・訳出）②「ケニア国別援助研究会報告書」, 1992, 国際協力事業団

35

南アフリカ

# イシナンバ地域開発計画

関係機関：イシナンバ地域開発センター：NGO
（トランスカイ・ホームランド地域マウントフレーレ地区）

イシナンバ地域開発センター（以下、センター）は、1975年、ホームランド地域の貧困の解消を目的として、黒人牧師夫妻によって設立された。活動内容は、南アの黒人ホームランドでの黒人の置かれている生活困窮かつ自由が制限された状況の中で、抑圧された地位にある女性によるグループ活動である。ロウソク作りから始まり、泉の保全、託児所設置等の活動を通じて、女性達が人間的な生活や尊厳を取り戻すことを目的とし、人間的な開発を目指している。

## ジェンダー問題

① 相互扶助的、家族主義的なアフリカ文化の伝統

この辺りの社会では従来から女性の社会的地位が低く、社会的な、あるいは家庭内の決定に関わることができない。組合活動への参加や市場にものを売りに行くにも、男性の許可が必要な社会である。

② アパルトヘイトによる経済的貧困

約300年に及ぶアパルトヘイト政策により、ホームランドと呼ばれる居住区に黒人が隔離され、黒人男性の大半は白人経営の鉱山や工場での単純労働者として出稼ぎにかり出された。この結果、ホームランドには、女性、老人、子供が残され、わずかでやせた土地での農業と老人の年金で生計を立てざるを得なかった。また、女性は家事全般に加え、農業など、従来は男性が担っていた仕事も行わなければならなくなった。

③ 男性の不在と無気力と精神的抑圧

男性達は家族と離れて暮らし、出稼ぎ職場の劣悪な環境で低賃金労働を強いられたこと、80年代後半には多くの男性が失業してホームランドへ戻らざるを得なかったこと等が原因で、気持ちが荒み、妻や女性へ暴力をふるうようになった。このようにして、男性は出稼ぎで不在か、戻ってきても失業や無気力でありがちなため、生活や共同体の問題に対処する上で、女性達は男性をあてに出来ない現実が生じたのである。

このため女性は、育児や水汲みなど家事全般はもちろんのこと、農耕、家畜の世話、家の建築や修理など、男性が中心となり担っていた仕事も課せられることとなり、労働の過重化と疲労感から自己抑制的な姿勢になっていった。

こうして、ホームランドの住民は、男性も女性も人間として尊厳や自信を喪失していった。

## ジェンダーへの配慮

当初なかなか心を開かない女性住民が、センターを受け入れ、興味を持つようになるまで待つことが活動の第一歩であった。このためには、話し合いを行うだけでなく実体験が重要であった。

① 創設期（1975年～1978年）

そこで、身近な問題をとりあげ興味をひくため、電気が無い村において必需品であるロウソク作り（それまでは白人工場の製品を買わねばならなかった）を始めた。女性達は、センターが用意した簡単な道具と材料でロウソクが作れることを体験すると、「白人だけが作れると思っていたものが自分達にもできる」という発見に目を輝かせ、次第に自分にも出来ることがあるという自信と、何かやりたいという意欲が生まれた。

② グループ育成期（1979年～1992年）

次いで、何かに取り組みたい人たちを集め、同じ集落内で女性20人くらいまでのグループ（アソシエーションと呼ぶ）を作ることにした。各アソシエーションから2名づつの参加による村落執行委員会（IVEC）を組織し、月例会を行った。活動は、メンバーにとって必要で、かつ自分達で出来ることを考え、実行してもらうこととし、多くは泉の保全、託児所設置、道の整備など個人の利益ではなく共同体にとって必要なものに取り組んだ。センターは全てのメンバーに対して技術的な研修を行う等の支援を行った。

③ 協同組合化に向けての活動（1992年～）

センターは、地域内の26村にアソシエーションが出来た段階でIVECと話し合いながら、自立的な協同組合を段階的に形成しようとしている。この結果、アソシエーションによっては、低額、低金利、長期の融資を受けつつ協同組合へと発展した例もある。

## 活動の成果

① 物的・精神的な面での成果

- 住民は生産活動やグループ活動に携われた喜びを感じるようになった。
- 改善への知識を得た。
- 自主的な活動が出来るようになった。

② 家庭面での成果

- 子供や若者がセンターの青少年活動に参加するようになった。
- 家庭内のコミュニケーションが促進された。
- 仕事をしたことによって現金収入の道が開けた。

③ 地域社会面での成果

- アソシエーション間の交流等、連帯が出来た。
- 活動が地域に広がった結果、水源（泉）の保全や保健衛生が改善された。また、託児所の運営が出来た。

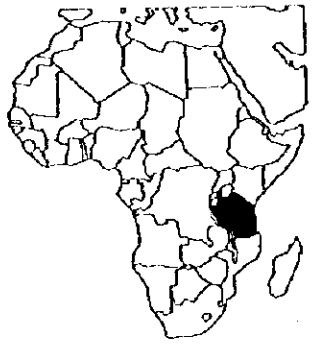
■参考文献：「農村生活改善のための女性に配慮した組織化支援検討事業平成８年度報告書」，1997年，国際協力事業団

36

タンザニア

# キリマンジャロ村落林業プロジェクト

関係機関：国際協力事業団（JICA）

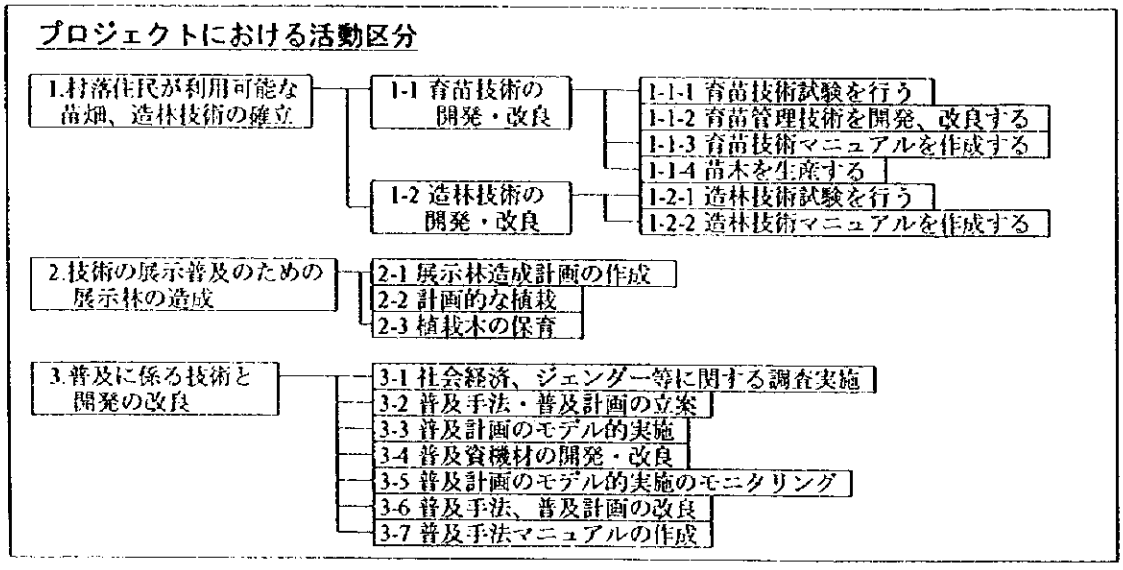


タンザニアでは、過度な薪炭材採取や過放牧によって森林が急激に減少しているため、森林減少の緩和と住民の薪炭林需要への対応が重要な課題となっている。JICAは、こうした課題に対し、タンザニア政府の要請を受けて、1991年からキリマンジャロ州サメ郡で半乾燥地における社会林業活動に必要な造林及び普及活動による技術改良を目的とした技術協力を行っている。

①村落住民が利用可能な苗畑、造林技術の確立

②技術の展示普及のための展示林の造成

③普及に係る技術と開発の改良




## ジェンダー問題

社会経済調査でジェンダーの分析を行い、以下の問題をあげている。

①女性・子供は労働過重で、植林活動への参加が困難である。

②女性の立場が弱く、土地や木に対する所有権が無いため、植林活動への意欲をなくしている。

③村の女性達は慣習やタブー等により森林活動に制限がある。

④このような抑圧に対して、女性達は「自分達に３年間家畜を渡せば変化を起こしてみせる」と反発している（女性には家畜の所有権もない）。

## ジェンダーへの配慮

社会経済調査のジェンダー分析の結果、女性が土地や樹木に対し所有権を持たないなどのジェンダー関係が、植林推進にマイナスとなっている事が明らかになった。そのため、キリマンジャロ村落林業プロジェクトでは、男女間の社会・経済的なアンバランスをなくしていくことが、植林活動促進に寄与するとして、ジェンダー担当官を雇用したりジェンダー研修を実施するなどの配慮を行っている。

<具体的な活動>

①社会経済調査の結果から、女性専用の苗畑の設置や女性を対象とした植林活動の実施により、女性の植林活動を支援する事が提案されている。

②村落林業、社会経済及びジェンダー分野の専門家が派遣され、造林の技術のみでなく、参加型手法、コミュニティ問題とともにジェンダー配慮の問題を検討した。

③女性や貧困層など、社会的に不利な層を含めた住民の参加を促すため、住民参加型農村評価（PRA）手法を導入している。

④1997年に日本からWIDの短期専門家を派遣し、ジェンダー施策の把握、女性グループの調査、ジェンダー担当官の指導及びプロジェクトチームのジェンダー研修を実施している。

## 活動の成果

①当初、プログラム手法により改善メニューを作って開発を進めていたが、参加型手法を導入し、PRAを実施して柔軟に住民のニーズに対応するようになった。

②住民の自主性や持続性を高めるため苗木を無償配布から有料化した結果、住民自身が苗木を育てるようになった。

③普及モデル地区では環境保全委員会が結成され、植林を通じた生産環境向上のため、住民自らが動くようになった。

④住民と行政機関とのコミュニケーションが良くなった。

■参考文献：「農村生活改善のための女性に配慮した普及活動検討事業～エンパワーメントを重視した農業農村開発の新しい進め方」, 1998, 国際協力事業団

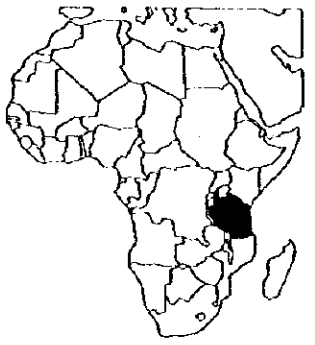
37

タンザニア

# 農業開発と貧困からの解放

## ローアモシ地区農業開発プロジェクト

関係機関：国際協力事業団（JICA）
キリマンジャロ農業開発センター（KADC）
キリマンジャロ農業開発プロジェクト（KADP）
キリマンジャロ農業技術者訓練センター（KATC）



タンザニアは1986年に「自由経済制」を導入したが、その中で社会的底辺に取り残された人々や女性差別などに対するジェンダー対応が課題となっている。1978年から始まったローアモシ地区の農業開発プロジェクトでは、農業生産の技術の向上とともにジェンダー視点による活動も成果をあげて、貧困からの解放や女性の地位の向上などで、地域農業が活性化した。

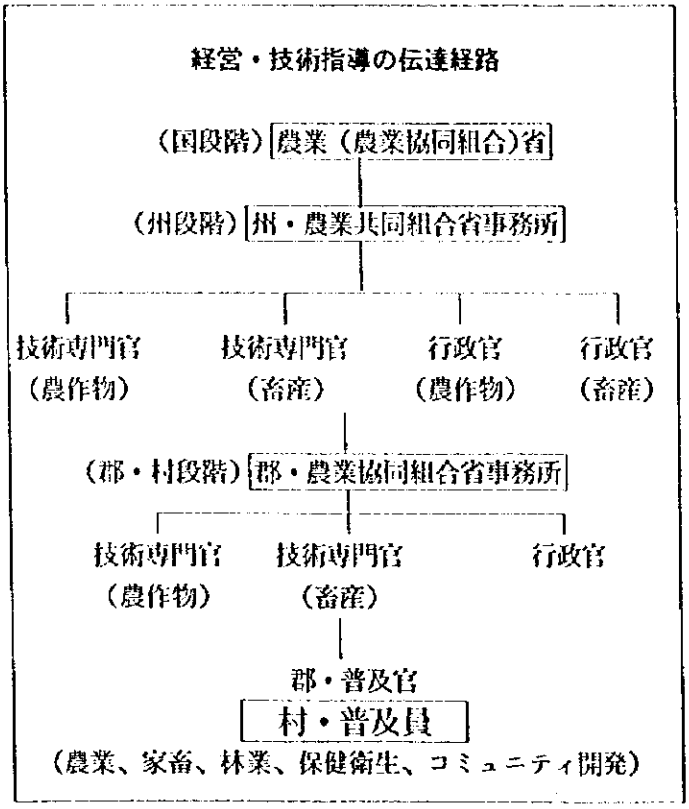
## ジェンダー問題

①社会全体に女性を差別する慣習・伝統的な価値観があり「開発と女性」の概念が一般に定着していない。

②国家の開発計画の立案過程では、WID概念が浸透していないこと、女性問題の理解が不十分であること、さらに女性の地位や社会状況を向上させる計画が不十分である。

③農村では、一家の主人（男性）が財布を握っており、女性が自由に使える金はほとんどない。

④実際に農作業に従事しているのは女性であるが、技術講習等に参加するのは男性である。
しかもこれらの講習会で伝達される技術等の知識は女性に伝えられている様子がない。




## ジェンダーへの配慮

①ジェンダー視点による普及活動

・女性が支えてきた農村生活をトータルに把握し、住民参加による計画の策定をする。

・農村女性を積極的に何らかの女性活動グループに加入することを誘導、セミナーや、村・普及

員の指導を受けて農業や生活改善（ジェンダー視点による指導）の知識を習得させるようにした。

②普及員への指導の強化と農民への伝達

・普及員に対する指導は、左図の流れの中で行われている。

・タンザニアでは1992年に政府が政府文書として「Policy on Women in Development in Tanzania」を出して「開発と女性」の概念を国民全般に理解させており、普及員も行政の流れの中で、ジェンダーの視点で農業技術と生活改善を普及指導している。

・農村女性への指導は集団指導方式で、中核農家を通じて行うが、別に女性グループを対象に指導を行うこともある。

## 活動の成果

①普及員と女性グループとのコンタクトの頻度が高まり、女性への技術指導が拡充したため、農村女性は農業の新しい技術や知識を学び、情報を得た。

・農業生産が向上し、所得が増大した。

・稲作のための新しい技術が導入され、米の収量が増加した。

・家畜の病気の予防により家畜の死亡が減少した。

・果樹の育て方、保護の方法が普及し、新しい所得ができた。

・農業に対して、男性と女性が共同で取組むようになった。

②ジェンダー視点に立った政策を進めるため、政府は政府文書（「開発と女性」）を政府機関や各種団体に通達したが、それらによって国内でジェンダーへの啓発が進みつつある。このことによってジェンダー視点から見た生活改善が進み、女性の能力が高まり、社会的地位が向上した。

・女性グループ等で野菜などを販売し、女性自身の所得創出ができ、子供の教育に費用がまわるようになった。

・衛生的知識と技術が普及し、保健衛生が改善され、病気が減った。

・助産婦を補助する方法も指導され、妊婦の苦痛が軽減された。

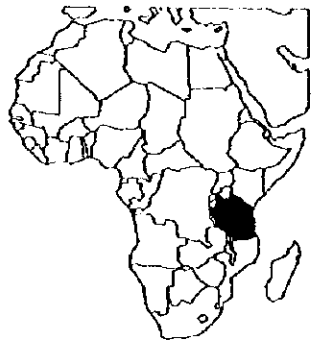
・男性の物事への考え方が広くなり、家族の人間関係がよくなった。

■参考文献：「農村生活改善のための女性の技術向上検討事業報告書」, 1995, 国際協力事業団
「農村生活改善のための女性に配慮した普及活動基礎調査報告書」, 1998,
国際協力事業団

38

タンザニア

# 村落女性普及員の課題



著　者：A. Basil

（論文による分析事例）

本事例は、「Women in Agricultural Extension : Proceeding of a National Workshop held in Dodoma」に記述されている事例を簡単に紹介したものである。従って、詳細な内容については原本を参照されたい。

農村の女性に対しては、男性普及員より同性の女性普及員の活動が期待されているが、彼女達は、男性と同じ資格を持ちながら、女性蔑視の慣習の中で、多くの問題をかかえている。新しい技術の伝達に取組む彼女達が直面しているのは、本質的には社会的、文化的問題なのである。

この事例は、このような女性に関する底辺の問題について、著者の体験から実態を明らかにしたものである。

## ジェンダー問題

女性普及員は、社会的文化的環境のもとで次のような厳しい状況におかれている。

① 女性普及員は、直面している問題に対して仲間と一緒に活動したいと思っているが、農民には社会、文化面からの分析力は男性と比べて劣ると見做されている。

② 殆どの人は女性は、子供を産む道具であり、子供や家庭を養育する召使いであるかのように考えている。

③ 女性は本質的な問題について、男性に口を出すべきではない、と言われている。

④ 村民は女性より男性の普及員を歓迎する。そのことは女性ですら同じである。

⑤ 女性には選択の能力がないという理由で投票権は与えられていない。

⑥ 会合の準備とか人集めの行事は主に男性の仕事である。

⑦ 因習的に女性の居場所は「台所」であると教えられている。

⑧ 女性普及員は農業の実際や、その他重要なことについての説明や伝達は出来ないものと思われている。

更にBasilが実際の現場で次のような事実を体験している。

⑨ 男性普及員の間違った行動はすぐ許され、忘れ去られるが、女性普及員の場合はそうは行かない。

例えば、男性普及員が婚姻関係外の性的行動を行っても許容されるのが一般的で、最悪の場合でも男性普及員は女性の夫か、夫の父か、兄弟に殴られて終わりであるが、これが女性の場合は「売春婦」と罵られ職を失う。

⑩ 独身の女性普及員は村のリーダーに性的関係を強要されるのが一般である。もし彼女が拒めば傲慢な女性と見做され、一方受入れたとしても不謹慎と言われ、何れにしても職を失う。

⑪ 女性普及員が速かに受入れられ信頼を得るためには結婚した方がよい。独身の女性普及員は男性からも女性からも素性を疑われる。

⑫ 村の女性達はあまり村の会合には出席しない。また女性普及員の企画した会合には、たとえ議題が女性問題に関することであっても出席しない。従ってジェンダー問題は女性普及員であっても当然とりあげられない。

## 分　　析

著者は女性普及員の活動を進めるには以下のような対策が必要であると分析している。

① 村の中で女性普及員の指導活動が可能であることを実証して、村人達を啓発することが必要であり、そのためのモデル地区を設定する。

② 地域を改善するためには、プロジェクトの実施困難の原因を明らかにし、女性普及員の活動地域の社会文化的状況を把握する。

社会・文化を理解することにより、障害を克服することが出来、人に対処する方法が分って来る。

③ 女性普及員の存在を認識させるために、伝統的な儀式や結婚式を含むあらゆる行事や、各種のグループ活動に女性普及員も参加する。

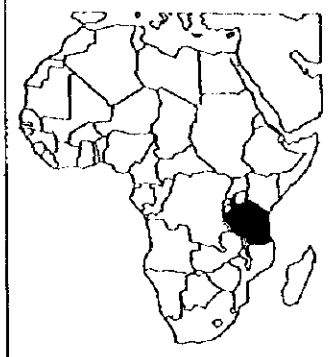
④ 村で直面している問題が農業に関係のないものであっても、その解決策について協力する。そうすれば、女性普及員と村人と仕事上の関係を作り上げ、やがて信頼を得るようになるであろう。

■参考文献：「Women in Agricultural Extension : Proceeding of a National Workshop held in Dodoma, Tanzania, 25th November to 27th November, 1991 Tanzania Society of Agricultural Education and Extension and Canadian Society of Extension.

39

タンザニア

# 農村女性達を支援する女性普及員の養成



関係機関：農業省
農業畜産研修システム（MATI／LTI：Ministry of Agricultural Training Institute／Livestock Training Institute

本事例は、「Women in Agricultural Extension : Proceeding of a National Workshop held in Dodoma」に記述されている事例を簡単に紹介したものである。従って、詳細な内容については原本を参照されたい。

タンザニアでは農業を担う女性の多くが、地区内の農業を周知した女性普及員からの指導を求めていた。1985～1989年にムワンザ（Mwanza），シニャンガ(Shinyanga)，マラ（Mara）及びモロゴロ（Morogoro）地区で始められた農業畜産研修（MATI／LTI : Ministry of Agriculture Training Institute／Livestock Training Institute）では、地区内からの女性が農業・畜産技術の研修に参加した。

## ジェンダー問題

タンザニアでは施策のすべてにジェンダー配慮することになっている。普及事業においても、ジェンダー配慮をすることになっているが、まだ十分にそれがなされていない。

タンザニアには約8,900の村落があり、およそ7,000人の普及員がいる。普及の活動方式は農家をグループ化して指導を行うT&Vシステムで、タンザニアの普及組織や活動は右表の通りである。

またタンザニアの農村では次のような問題が見られる。

①市場経済の浸透とともに、農業も大きく変わりつつあり、従来の米やメイズに加えて換金作物の生産が急がれ、女性にも新しい技術の指導が必要であるが、普及活動の体制上からもそれが十分になされていない。

②農業においては女性の労働力が農作業を大きく担っているにもかかわらず、社会では慣習的に女性が「意思決定の場」にはいれない。また農業経営等に関する情報は普及員等を通じて男性にはもたらされるが、女性には十分に伝えられていない。

③普及員は村落に駐在しているが、全ての村落に駐在しているわけではない。また男性の普及員が女性農民を対象に普及活動をすることについては慣習的な制約が未だに残っており、女性の普及員の数も少なかった。

## ジェンダーへの配慮

①普及員の研修／養成は、研修生を上記の地区内から公募し、地区の農業に直ちに活用できる

ような内容に配慮したもので、研修の修了者は出身地区において普及活動に従事することになっている。

②女性も募集の対象に入れて、農業一般、作物、畜産、水利、土地活用、農業機械、食品・栄養、山間地農業経営の各コース（選択）を研修し、修了後は普及員（又は普及員の助手）として主に女性農民を対象とした普及活動に従事する。

## 活動の成果

①MATI／LTIシステムは実施5ヵ年で2,190名の研修生を受け入れた。（うち、男性1,817名、女性373名）である。

②研修の修了者は出身地区へ帰り、普及員（又は普及員の助手）として、農業・生活・青少年育成についての普及活動に従事した。特に、女性普及員（又は助手）は女性農民との接触にあたり、慣習上の制約にとらわれることなく、円滑な普及活動ができた。

**タンザニアの普及事業の組織（概要）**

●国政レベル　農業省　農業畜産開発局（コミッショナー）

「普及担当局長補」

「主任普及官」国の普及事業の統括

- 畜産
- 作物（作物保護、食用作物、樹木作）
- 普及研修（農業研修所を持っている）
- 農業情報（印刷物、テレビ、ラジオ）
- 自然資源
- 婦人・青年普及

各担当官及びスタッフ

●州（Region）レベル　・農事事務所が置かれ、「農業普及官」がいる。

●県（District）レベル　・「農業普及官」
畜産、作物、農業研修、農業情報、自然資源、婦人・青年普及

●郡（Sub-District）レベル・農業事務所が置かれ、「普及員」が所属している。

●村（Village）レベル　・現地普及駐在所に「現地普及員」が駐在している。

出典：「各国農業普及組織概要一覧」全国農業改良普及協会　1995年より

■参考文献：「Women in Agricultural Extension : Proceedings of a National Workshop held in Dodoma, Tanzania, 25th Novenber to 27th November, 1991」, Tanzania Society of Agricultural Education and Extension and Canadian Society of Extension

40

ジンバブエ

# 農村女性がグループを率いて活動をすすめる

関係機関：「ツヴィチャナカ」農業グループ
国連食糧農業機関（FAO）、
コミュニティ・共同開発・女性問題省

本事例は、「女性が語る第三世界の素顔－環境・開発レポート」に記述されている事例を簡単に紹介したものである。従って、詳細な内容については原本を参照されたい。

「ツヴィチャナカ」農業グループは、女性の農業従事者の役割を開発することを目的に、コミュニティー・共同開発・女性問題省とFAOが合同で実施しているプロジェクトで作った130のグループの一つである。

開発プロジェクトは往々にして女性の家庭内での労働のみを重視し、農作業への役割について配慮していなかったが、本プロジェクトは、女性を農業での主体的担い手として強調している。

## ジェンダー問題

① かつて、女性達の裁縫や編物クラブであった「ツヴィチャナカ」のメンバーの大半がこのプロジェクトに参加しており、メンバーの1人は「ほんの僅かの収入しか得ることができ来なかったことや、殆どの女性が農業についてもっとよく知りたがっていたと証言している。

② 世間一般には、女性は家庭の中での仕事に集中していればよいとの認識があり、農業への女性の参加を妨げている。本プロジェクトはこの風潮を打破し、女性の農業への参加をすすめ、女性は実際の農業従事者であることや主要な農作業の中にこそ女性の果たす役割があることを強調している。

## ジェンダーへの配慮

① 18人の女性メンバーは、試作用に寄付された農地に、半額で提供された化学肥料を用いてトウモロコシを栽培することになった。女性達は合意のもとで、この活動に男性を加え、土地を耕したり垣根を作ったりする仕事を分担させている。

8人のプロジェクトの実行委員のうち、女性は半数を占め、保守的な地方であるにもかかわらず女性（寡婦）がグループの指導者となっている。

女性の主体性を確保するため、男性は全体の40%以下になるよう制限している。

② 初めの頃から週に2回の会合が設定され、正当な理由なしに会合に欠席したら1.5米ドルを罰金として支払わなければならないことになっている。その根拠は、「他のメンバーの努力にただ乗りして儲ける人の出るのを避けたかったから」と説明している。

また、会合の際、男は酒等を飲んであたりを散らかしていたが、女性が会の運営にも主体性をもつようになることで、酒を飲んで散らかす暇などなくなったと言っている。

③ トウモロコシの次に有望な換金作物としてヒマワリと豆類を選び、決まった会合場所を設けて農業指導員の指導を受けている。農業指導員は、同時に複数のグループ員に指導でき、また、グループのメンバーもサービスを十分に受けられるようになった。

## 活動の成果

① このプロジェクトの最大の特徴は、女性に知識や情報を男性と変りなく与えた結果、女性達が、平等という考え方と意思決定の方法を新たに身につけたことである。

5年間のプロジェクトで3年目を迎える。かつては裁縫や編物のクラブであったが、トウモロコシの試作を始めて、男性も活動に加入したため、男性の経験技術を学び、また、力仕事を男性に任せる協力態勢が出来た。

この「ツヴィチャナカ」グループのメンバーは、週2日の農休日も休まず、村の外にある集団耕地に出かけ、数時間耕作に汗を流している。

② グループに参加することで女性達は特に自信を持つようになった。あるメンバーは、「私達のグループと他のグループのメンバーと比べると、歩き方、知識、議論の仕方等が違っていると思う。また、私達のメンバーは、恥ずかしがったり、尻ごみしません。」と言い、その他のメンバーも「このごろ私が研修コースに行っている間に、家にいて料理をするよう夫に言えるようにさえなりました。」と言っている。

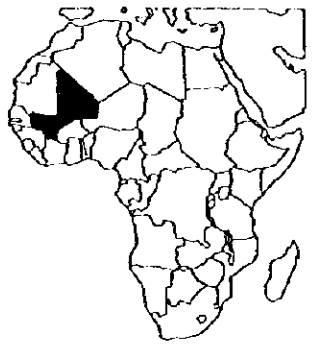
■参考文献：「女性が語る第三世界の素顔－環境・開発レポート」，アニータ・アナンド編，ＷＦＳ日本事務局訳，1994，明石書店，pp.136～140（‘農婦がグループを率いて活動をすすめる’ コリーン・ロウイ・モルナ）

41

マリ

# 女性の生活向上支援活動

関係機関：カラ＝西アフリカ農村自立協会（NGO）



1992年に発足したNGO団体「マリ共和国健康保健医療を支援する会」の名称を1993年に「カラ」に変更、将来は活動範囲を西アフリカの他の国にも広げ、医療以外の幅広い分野に亘る活動展開を予定した。「カラ」設立の2年前から医療サービスや女性に対する支援を単身で行っていた村上一枝氏の活動を踏襲する目的で、資金、活動両面の補強が行われてきた。

1994年、活動拠点を最貧のバブグー村に移し、社会的地位の低い女性を対象に、彼女らの生活を向上させるために支援活動を進めている。この村での活動はすでに3年を経過し、住民自体で様々な活動に取り組む姿勢が醸成され、周辺の村にも波及しつつある。

対象地域であるバブグー村は首都バマコより北東約100km、サハラ砂漠に近い厳しい環境で、主要食糧のミレット、ソルガム等の作柄は雨量次第で極めて不安定である。村には電気、水道、定期的な交通手段はなく、公共施設も殆どない。

## ジェンダー問題

①一夫多妻制で、男性は家族に主食だけを与え、その他の生活物資、生活資金は殆ど与えない。従って主婦は主食以外のすべての生活物資調達に責任を持たされ、薬代、学用品、食材まで自分で工面しなければならない。

②主婦は自分で作った落花生や菓子類を販売して少々の現金収入を得ても、自分のためには使わず、夫や子供のために使うことになる。

③女性の社会的地位は低く、家庭生活に関わる意思決定は夫が行い、農地の所有や生産資源の利用がむずかしい。

④女性が組織作りやプロジェクトを始めるにしても、夫や村の長老の決定に従わなければならない。

## ジェンダーへの配慮

①女性の活動の場を少しでも広げていくには、女性が意思決定の場に参画できるよう、女性自身の意識を研修により変えていくことが必要であるが、女性が研修を受けられるよう夫やコミュニティの承認を得ることが前提となる。

女性を研修に参加させるには → 夫の許可が必要 → 村長老の承認が効果的 → 長老の理解を得て村全体も承認

（対策）＊「カラ」の職員は第三者としての立場から、積極的・継続的に長老や男性に働きかける。
＊納得してもらうまで目的・意義等を繰り返し説明、説得にあたる。
＊長老が十分に理解すれば、プロジェクト活動も容易になる。
＊プロジェクトの進行によって、その成果を村人の目前に示した。

②研修への取組みについては次のような配慮がなされた。

「カラ」の職員が、直接農村女性の指導に当るマリ人スタッフを訓練する。

↓ 十分指導力をつけた段階で、マリ人スタッフに活動を全面的に任せる。
指導は、相手と感情を共有し同じ目線で行う姿勢を重視する。

能力を備えたマリ人スタッフは更に教え子の中から能力のある者をリーダーに選出し逐次指導を任せる。

↓ 現地マリ人に指導を任せたことは、女性の自立化を高め、技術移転を容易にするとともに持続性のある普及活動を可能にする。

女性リーダーを育成し、女性の組織化を促す。

## 活動の成果

普及のプロセスを現地の人々に極力任せたこと、村や集落の社会的慣習や合意形成の在り方等について十分理解しておいたことが成功への要因となっており、具体的活動とその成果は以下のとおりである。

①識字教育の普及により、書類の作成が可能となり、男女の立場が均等化に向い、女性が徐々に村の計画にも参画出来るようになった。

②女性の組織化により集団の力が強まり、村の中での発言力が強まった。

③防風林、薪炭林の造成により、手近な場所の薪の採取が可能になるとともに環境の維持に役立った。

④改良カマドの開発普及・深井戸の設置により、女性の炊事労力の節減、野菜畑や家事への給水に役立った。

⑤保健衛生・環境の改善により、衛生への意識が高まり住民の疾病が減少した。

⑥野菜栽培で女性も自分達で所得創出が出来るようになった。

⑦生活改善の技術及び意識が高まり、自らの意思による経済活動、遊休地の耕作等社会活動や生産活動の場を広げることが出来た。

⑧女性たちはそれぞれの活動を通じて自信と希望を勝ち得た。ただし、一夫多妻制の現状を観察すれば、第一夫人と第二夫人の立場は強化され、第三夫人以下は依然として厳しい立場にある。

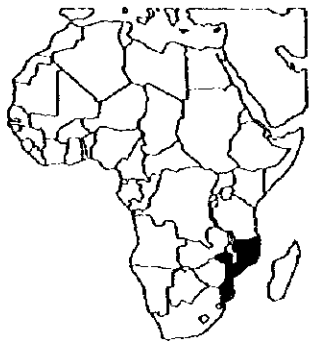
■参考文献：「農村生活改善のための女性に配慮した普及活動検討事業～エンパワーメントを重視した農業・農村開発の新しい進め方～」1998, 国際協力事業団

42

モザンビーク

# 土壌の侵蝕を防ぐ女性達

関係機関：モザンビーク政府、国際NGO、
ナンプーラ生活協同組合



本事例は、「女性が語る第三世界の素顔－環境・開発レポート」に記述されている事例を簡単に紹介したものである。従って、詳細な内容については原本を参照されたい。

モザンビーク北部のナンプーラ地方の人々は、森の中に家を構え、森から必要なものを得ていた。しかし10年以上も続いた内戦で、生活の調和は破れ、森林は破壊された。森林破壊は、薪を取りに行く女性の労働をきつくすると同時に、土壌の侵食や乾季の河川の乾渇につながった。そこで、政府、国際NGOと地方の女性グループは、森林の保護を重視し、生態系の破壊を食い止めようとしている。

## ジェンダー問題

① ナンプーラの女性達は家族のために食用作物を栽培し、薪と水を運び、家族の健康を守っている。森林破壊がすすむナンプーラでは、こうした作業を行うのに徐々に遠くまで行かねばならなくなり、女性の労働の負担が大きくなっている。

② 次第に燃料用の薪を森林から得ることができなくなり、20kmも歩いて行き、高い値段で業者から買う必要も出てきている。このような時間と労力の負担は、すべて女性にかかっている。

## ジェンダーへの配慮

① 県都ナンプーラの郊外の森林地帯で働いている80人を超える小作員の女性達が生活協同組合を結成した。

② 森林伐採の影響を最も受けているのが女性達であるため、政府、NGO及び地元の生活協同組合の女性達は森林の保護を重視して、生態系の破壊を食いとめようとしている。

(1) 県の森林部では自然林に頼るだけでなく、自分達の育てた樹木で燃料を賄い、落葉で土地を肥やし、さらに果樹を植えることで家族の栄養改善にも役立てようと、森林拡張計画に着手した。「ユーカリ」「カシュー」「柑橘類」などの 5,000粒の種子を農家に配布し、畑周辺に播くよう指導したが、樹木の成長はゆっくりで成果が現れるまでには長い時間がかかるため、多くの農民は消極的であった。

(2) そのため、女性達が組織する生活協同組合では、組合員の協同農場において、等高線に沿って畔を作り雨水を貯め、さらに種子が流れないようにするためにサイザル麻などを植

える工夫をした。これにより、確実に作物を育て植林の有効性を地域の農民に示し、植林に対する理解と関心を得るように努めた。

(3) その他、女性達は土地を肥やすために有機肥料を混ぜる方法を試したり、調理用に燃料効率の良いカマドも開発している。

## 活動の成果

女性達の活動の成果は、今後厳しい天然の災害や内戦がなくなれば徐々に現れてくると期待される。現状について女性組合員は、「非常にきつい作業であるが等高線栽培は有効である。作物を育て、畑を美しく保ち、たくさんの人達に見に来てもらっている。これを見た人達が、私達にならって植林することを期待している」と語っている。

■参考文献：「女性が語る第三世界の素顔－環境・開発レポート」アニター・アナンド編，ＷＦＳ日本事務局訳，1994，明石書店，pp.98～102（‘土壌の浸食を防ぐ女性たち’ レイチェル・ウォーターハウス）

43

セネガル

# 農民同志の自主的活動

関係機関：Enda Graf Sahel（エンダ グラフ サヘル）（国際NGO）
Africare（アフリケア）（地域NGO）

「エンダグラフサヘル」は、ダカール市に本部を置く国際ＮＧＯであり、国内の1,000近くの村にネットワークを持っている。

セネガル中部のカオラック州ンディアンブール村では、このネットワークの１つである「アフリケア」というＮＧＯの支援を受けて、「タクリゲイ」という女性グループが、自主的に仲間同志で、他村の農民組織とも交流し、活動を展開している。

## ジェンダー問題

① 女性の地位は低く、一夫多妻の慣習が未だ一般的であるる。

② 生活上の実権も夫が握り、生活費も妻の意思では思うに任せず、妻は、落花生ほか２～３の作物を作り、これ等を路上で販売して、唯一の収入源としている。

## ジェンダーへの配慮

① 牛と羊の肥育、養鶏、森林資源の開拓など、家庭に収入をもたらすあらゆる活動で、女性の果たす役割に注目している。

② 食糧の確保及び販売による現金収入のための活動は主に女性が行っている。

③ 女性達は、子供の医療費などを融通し合う目的で、金を出し合い共済活動を実施している。その結果、町の高利貸に頼らずにすむようになった。

女性グループである「タクリゲイ」グループは、1992年より農業開発、自然環境管理、女性の参加促進、識字教育、経済開発を柱とした活動を展開している。このうち研修プログラムは常に理論と実践を組合わせた形で行われている。

例えば苗木作りの場合：

①苗木作りの重要性を啓蒙【理論の説明】

②「アフリケア」により苗木、肥沃土、砂が配布される

③肥沃土をふるい砂と混合する【実地研修】

④この肥沃土と土を混ぜたものに水を加え団子が出来るかどうかテストする【実地研修】

⑤配布されたビニール袋に混合土を詰め苗木を植える【実地研修】

⑥手分けして苗畑に水を撒く（若者が井戸から水を汲み、年寄りが如露で水を撒く）【実地研修】

またワークショップの受入先となったシカトゥルン村の農民組織であるンガスラゲングループとの交流も行っている。

①1995年に設立されたばかりのンガスラゲンのグループも「タクリゲイ」グループの自主性のある活動を学び、外部の仲介者の手を借りずに、同じ村の経験豊富な農民組織から直接技術を学ぶ方法をとっている。

②端境期に貯蔵穀物が底をつき、生活の糧を得るために農機具を売ったり、高利貸から借金する弊を防止するため、「穀物銀行運営管理」の手法を学ぶ。

③共同で堆肥作りの技術を実地研修で学ぶ。これを畑に投入した結果、収量が倍増した。これは上記「穀物銀行運営管理」の研修に参加した農民からの情報を得て実施したものである。

## 活動の成果

女性達の自主グループの実践を重んずる活動から、農民同志の横の連携で活動の輪を広げ、具体的成果を挙げるに至った。

■参考文献：「国際農林業協力VOL 21.NO.4」，1998年，㈶国際農林業協力協会
（'国際NGOエンダ＝グラフとアフリカ日本協議会のセネガルにおける共同調査から'
楠田一千代）